

コロナ後の説教の作り方

塩 谷 直 也

見よ、私は新しいことを行う。
今や、それは起ころうとしている。
あなたがたはそれを知らないのか。
確かに、私は荒れ野に道を
荒れ地に川を置く。

イザヤ書43章19節¹

はじめに

2020年度、2021年度とコロナ対応に翻弄され2年が過ぎた。

この未曾有の経験の中、青山学院大学宗教主任（チャプレン）たちは数回の緊急事態宣言をはさみながらも、授業期間内毎日行われる礼拝説教を続けた。しかしそれは従来の「礼拝堂に人を集め説教をする」スタイルとは大きく異なってしまう―説教する場所が変わり、目の前の聴衆は消え、度重なる予定変更が日常となり―結果として私の説教作成のプロセス自体をも変えてしまうこととなった。

今回の小論は昨年度の「青山学院大学の宣教 新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受けて」の続編として、これら礼拝を取り巻く外的環境の変化

1 『聖書 聖書協会共同訳』、日本聖書協会、2018。

が、聖書からメッセージを取り次ぐ「説教」という私の営みにどのような変化を与えたかを記録したい。² それは単なる前回の補足、個人の備忘録には終わらない。なぜならいかなる個人的記録も否応なく社会の問題を映し出す鏡となり、そこからこの時代の特質を後世は読み取るからである。私個人が、そしてキリスト教会が説教において先送りにしてきた諸問題を、この記録は結果としていくつか浮き彫りにするかもしれない。

三つの「ない」

①聴衆の反応がない

インターネット環境を利用した礼拝動画配信の場合、聴衆の顔は見えないし、反応もない。仮に目の前に学生がいても、感染予防のためのマスクをしているため、表情は読めない。このような「聴衆のいない場所での説教」が教会や学校で「日常」となったのは、おそらくキリスト教宣教史上初めてであろう。

下を向きひたすら原稿を読み上げるだけの話者は例外として、通常説教者は語りながら聴衆の反応（頷き、微笑み、哄笑、腕組み、瞑目、居眠り、ひそひそ話）を意識し、そこからくみ取れる非言語的メッセージを瞬時に解釈しながら、（意識的に無意識的に）声の強弱、間の取り方、繰り返し、省略、微調整、修正、中断を行う。それは説教が常に聴衆との対話において生み出されてきた歴史にもよる。³

2 「青山学院大学の宣教 新型コロナウイルスによる緊急事態宣言を受けて」、青山学院大学宗教学主任会編、『青山学院大学宗教学主任研究叢書 紀要 キリスト教と文化 (36)』、2021年、153~191頁。

3 説教者のモノローグを聴衆がひたすら聞き続けるのではなく、説教者と聴衆の言語化されえないダイアログによって説教が生まれる姿は、旧約の預言者、またイエスと民衆の対話から読み取れる（サムエル記下12章、マタイ15章21~28節）。しかしそれらの根源は、いうまでもなく神から人への言葉が一方通行のものではなく、対話によって成立している点にある（創世記18章16~33節 神の言葉はアブラハムとの対話によって揺り動かさ

しかし以上をほとんど失った説教者は、ひたすら聴衆の反応を想像して語り続けることとなった。当初はそれも新鮮なものであったが、2年経過するとさすがにモチベーションの低下を招かざるを得なかったのではないか。スポーツの無観客試合が、少なくないアスリートたちのやる気を奪ったことは記憶に新しいが、それは礼拝堂でも起こったことなのである。

②自分の声のモニターが取れない

礼拝堂内であれば、自分の発声がマイクを通してどのように反響しているか、届いているか、聞こえづらいかある程度確認できる。いわゆるモニターを取りながらかつては話していた。しかし、オンラインとなって、自分の声が相手のデバイス（PC、タブレット、スマートフォンなど）を通し、どうやって実際の耳元に届いているのか（イヤホンなのかヘッドホンなのか、スピーカーなのか、しかもそれらは一般的なものか高品質なものか、もしくは音声を消して字幕で理解しているのか）が不明となった。加えて通信環境が双方整っているかどうか確認のしようがない。よってこちらの声がイメージ通りに届いているかどうかわからない中で語るしかない。

自分の声が、思い通りに届かず、肝心なところが伝わっていないかもしれない、との不安全感は、回を重ねるごとに徒労感へと変わっていくこととなった。

③昨日の準備が今日、役に立たない

対面で行う予定が直前でオンラインに変更、また30分の予定が密集時間を減らすために20分に短縮など、丁寧に計画を立てても変更、いや計画自体がキャンセルとなるケースが頻発した。そのたびに、努力したものがどこにも生かされず廃棄されることも一度や二度ではなかった。それは○人分の料理を発注され、メニューの考案、買い出し、調理もこなし、テーブルにセッティング出来

れる。また『ヨナ書』において、ヨナとの対話を通し、神の言葉は徐々に明確さを増していく。

ていたのに、急にキャンセルが入るような感覚と言っていていいだろうか。

腹立たしい思いもしたが、しかし考えてみればキャンセル自体が問題なのではなく、予定通りに事が進むと思い込んでいること自体が私（たち）の問題だったのかもしれない。⁴

この状況への対応

①Keynoteを用いた説教作成

KeynoteとはApple社が開発したプレゼンテーションツールであり、同社のほとんどのデバイスで使用できる。⁵ プレゼンテーションツールとしては歴史のあるマイクロソフト社のPowerPointが有名であるが、一般にPowerPointが論理的な説明、図表に強く、Keynoteはビジュアル、アニメーション表現に長け、直観的操作に優れると言われる。とりわけApple Pencilを用いてipad画面に直接書き込める手軽さは大きい。前章で述べた説教での手詰まり感を打開し、画面だけで参加している聴衆に「動き」を伝えたいと考え、2021年よりKeynoteを用いての説教作成を試み始めた。⁶

このKeynoteを使つての説教スタイルによって、結果的にいくつかの変化が私個人に起こった。まず完全な説教原稿をあえて作らない形となった。スライド画面自体が聴衆に見せる資料であると同時に、説教者の原稿となったのである。一つ一つの言葉、絵、アニメーションによって、説教者の言葉が導き出さ

4 「さて、『今日か明日、これこれの町へ行つて一年滞在し、商売をして一儲けしよう』と言う人たち、あなたがたは明日のことも、自分の命がどうなるかも知らないのです。あなたがたは、つかの間に現れ、やがては消えてゆく霧にすぎません。むしろ、あなたがたは、『主の御心であれば、生きて、あのことやこのことをしよう』と言うべきです。」（ヤコブの手紙 4章13～15節）

5 <https://www.apple.com/jp/keynote/>

6 礼拝堂で説教を聞く場合、聴衆は自由な視点移動を行えるのでそれ自体が動きを生む。しかし画面上で話し続ける説教者を固定カメラで見続けるとなるとそうはいかない。これでは静止画と変わらない、との批判を受けても仕方ない。

れるよう設定し、練習を重ねる。説教者は手元の原稿などには目を落とさず、画面と聴衆への視点移動だけで語る。上記③で記した刻々と変化する状況への対応を考慮した場合、結果としてこのスタイルが最適であった。⁷

説教で一般的に用いられるいわゆる逐語的な「完全原稿」は、その人の持つ能力を最大限に生かし、時間をかけて事前に文字に起こす。これによって話が大きくテーマから逸れることもなく、予定時間内に話も終わり、説教者にも聴衆にも一定の安心感を与える。⁸ しかしコロナ禍は私たちに、世界の状況は刻々と変わり、書いた時点の最良の判断は、翌日、最悪の選択であったとみなされる可能性があることを教えてくれた。昨日力を尽くして完成させた原稿も、今朝には古びている現実を突きつけたのである。Keynoteの場合、状況の変化に対応し、文字や絵柄を直前に消去、追加もできる。説教中、ペンで修正も図れる。しかも機材さえそろえば、対面でもオンラインでも対応可能である。完全原稿でないが故の曖昧さが、結果的に状況に即応する力につながる。

しかもKeynoteは、これらの説教の「開始から完成」までを「1枚の紙」で仕上げる感覚で行える。通常、私がWordなどで説教を完成させる場合、大まかな説教内容、論旨などブレインストーミングを兼ねて、1枚の紙に手書きで行っていた。そこで描かれたイメージを少しずつ文章の骨格として整え、全体像が見えてからPCに向かい原稿を作成していた。しかしKeynoteはこのスタート時のブレインストーミングからペンで書き込み、修正し、骨格を作り、完成へと導いていける。それはたとえて言うなら一つの鍋に食材を投げ入れ、

7 講義、講演でのプレゼンにおいて、原稿なしで画面を見ながら話す光景は珍しくない。それは私自身も行ってきた。しかし説教において、手元の原稿を無くしたのは初めてである。このことは（完全原稿では可能だった）説教の正確な「再現性」を放棄したことを意味する。現状が変わっているのに、同じ内容を再現することに疑問を感じた結果である。後述するが、そもそも現実も変わり、（語る側、語られる側の）人間も変わっているのであるから正確な「再現」自体、不可能なのである。

8 しかも説教の冊子転載を求められた場合、完全原稿なら説教後すぐにコピーを渡せる。このあたりも完全原稿は一度作れば便利であった。

そこで洗い、皮をむき、切りそろえ、調味料を入れ、煮込み、最後はその鍋のまま食卓に出せるのである。

なお以上のやり方でどのような説教となったか、一例を以下のYouTubeの動画で確認できる。

<https://youtu.be/40cKr6lWqqQ>

②隠された「本当のこと」を引き出すためのツールとして

精神科医の神田橋條治は2006年当時、Power Pointによる講演を批判、原稿のある話がなぜ面白くないか、以下のように語る。

ところが九大の先生は、最新式のパワーポイントを使ってやったんです。結果は著しくつまらない、予想外に面白くなかった。ケース自体は面白いケースだし、発表も魅力的、なのにまったく面白くない。…なぜボクは原稿を作らんのかなあって思ったけど、原稿を作ってやるとね、何か面白くないのよ。…原稿を作ったときの自分と、読んでいるときの自分とは、もう人間が変わってしまっています。まあ、変わってるかどうかは分からないけれども、原稿を作っているときの自分は楽しかったかもしれないけれども、原稿を読んでも今の自分は楽しくない。ところが原稿を作らないで話していると、予想外に話が変わってくるから面白いんです。⁹

神田橋は原稿が未来を決定し、予想外の話を生み出さない故に「面白くない」と語る。そしてその「原稿」の最たるものがパワーポイントだと言う。

9 林道彦・かしまえりこ編、『神田橋條治 精神科講義』、創元社、2012年、160～161頁。

パワーポイントでやっていると、その次のスライドはもう決まってるから、ボクがなんか言って「ああ、そうだな」と思っても、「それはそうだけど、はい、次のスライド」と次のスライドを映すでしょ。…過去の、一所懸命にスライドの準備をしたときにそのレポーターがあらかじめ考えた話の流れが、絶対に全体場を支配するんだ。過去の流れが今の全体場を支配する。スライドをいっぱい作って話をする先生は途中で何かを思い出しても、次のスライドと話がごちゃごちゃになるような場合は、「これは、話すと他のデータとごちゃごちゃになって、話が入り組んでくるからやめておきます」と、そのときに初めて思いついたような新鮮な考えは語らないから、瞬間、瞬間が新鮮である、ということが起こらないんです。¹⁰

プレゼンテーションツールの使用がなぜつまらないものになるのか、それは「あらかじめ考えた話の流れが、絶対に全体場を支配する」からだという。しかし、コロナ禍は、この「あらかじめ考えた話の流れが、絶対に全体場を支配する」ことを無効にした、と言えないだろうか。今日の感染者数、社会や世界の動き、瞬間、瞬間に目を開き、耳を澄ましていないとメッセージ自体が誤解されてしまう事態を引き起こしたのだ。それこそいるはずの聴衆は消え、自分の声が届いているかどうかわからない不安を抱え、予定は中止になり、初めてのことでだらけで失敗を繰り返し、話が入り組んで「ごちゃごちゃ」になるけれども、そこから新しいものが生まれる環境に、強制的に私たちは投げ込まれたのだ。その視点でプレゼンテーションツールをあらためてとらえなおす時、それは神田橋の言う「全体場を支配する」過去の死んだスライドではなく、逆に「ごちゃごちゃ」した今日の新しさを刺激し、隠されたものを引き出してくれる媒体として理解できるのではないだろうか。

10 林・かしま、前掲書、164頁。

私は完全原稿を否定しない。これから状況によっては作るだろう。しかし同時に、ここに本質が余すところなく語られているともみなさない。なぜならこの「本質」から少しずれたところに「本当のこと」が語られるからだ。

このコロナ禍、頻繁なテレビ会議によって効率化は進んだが、同時に会議が終わった後のちょっとした余談が奪われた。そしてその「余談」でどれほど重要な事柄が話されていたかとも思い知らされた。この余談、余白、隙間の自由な空間で私たちは「実は…ということがありまして…」という本音を語っていたのである。この「実は…」が語られる空間を、説教内にも回復したい。もちろん大学礼拝と言う時間制限の厳しい環境で、隙間だらけの説教は許されない。しかし完全原稿を読み上げるだけの「過去の流れ」で「今の全体」を支配する説教は、ますます通用しない状況になっているのは確かである。仮に言いよむことや、場合によっては沈黙が与えられたとしても、瞬間を新鮮に切り取ろうとする営為に、聖霊の働きが与えられることを信じたい。¹¹ そしてその隙間をつくる手段の一つとして、説教におけるプレゼンテーションツールの新たな活用をも提案したいのである。

最後に

2022年は年明けから「メタバース（3次元の仮想空間）が広がる」との予想が各種メディアで出されている。アバターによってもう一つの自分、人生を歩む可能性も開けてきた。「人間の根本的な概念を問い直す」こととなりそうだが、そうであれば福音の告知の仕方も大胆な変革をさらに求められるかもしれない。¹² 正直、この2年の変化についていくので精一杯ではあるが、逃げる

11 「何を言おうかと心配してはならない。その時には、あなたがたに示されることを話せばよい。話すのはあなたがたではなく、聖霊なのだ。」(マルコ13章11節)

12 「メタバースでは、ビーチに大きな家を構えることもできるし、対人恐怖気味の人もアバターになれば、気後れすることなく人と付き合えることがある。性を転換したり、空を飛んだりすることもできる。いやなことを無理やりやらされることなく、もっと楽しく

わけにもいかない。「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ」（フィリ
ピ3章13節）走る、先の見えない新たな一年を再び迎える。

生きることが出来るようになる。ゲームの延長にとどまらず、人間の根本的な概念を問い
直すことになるかもしれません。」（三淵啓自デジタルハリウッド大学教授 「メタバース
仮想空間の未来① アニメと漫画の王国から」、東京新聞、2022年1月9日朝刊、12面）